

資料紹介

名取郡物響寺の文明五年銘磬

石 黒 伸 一 朗

(1) はじめに

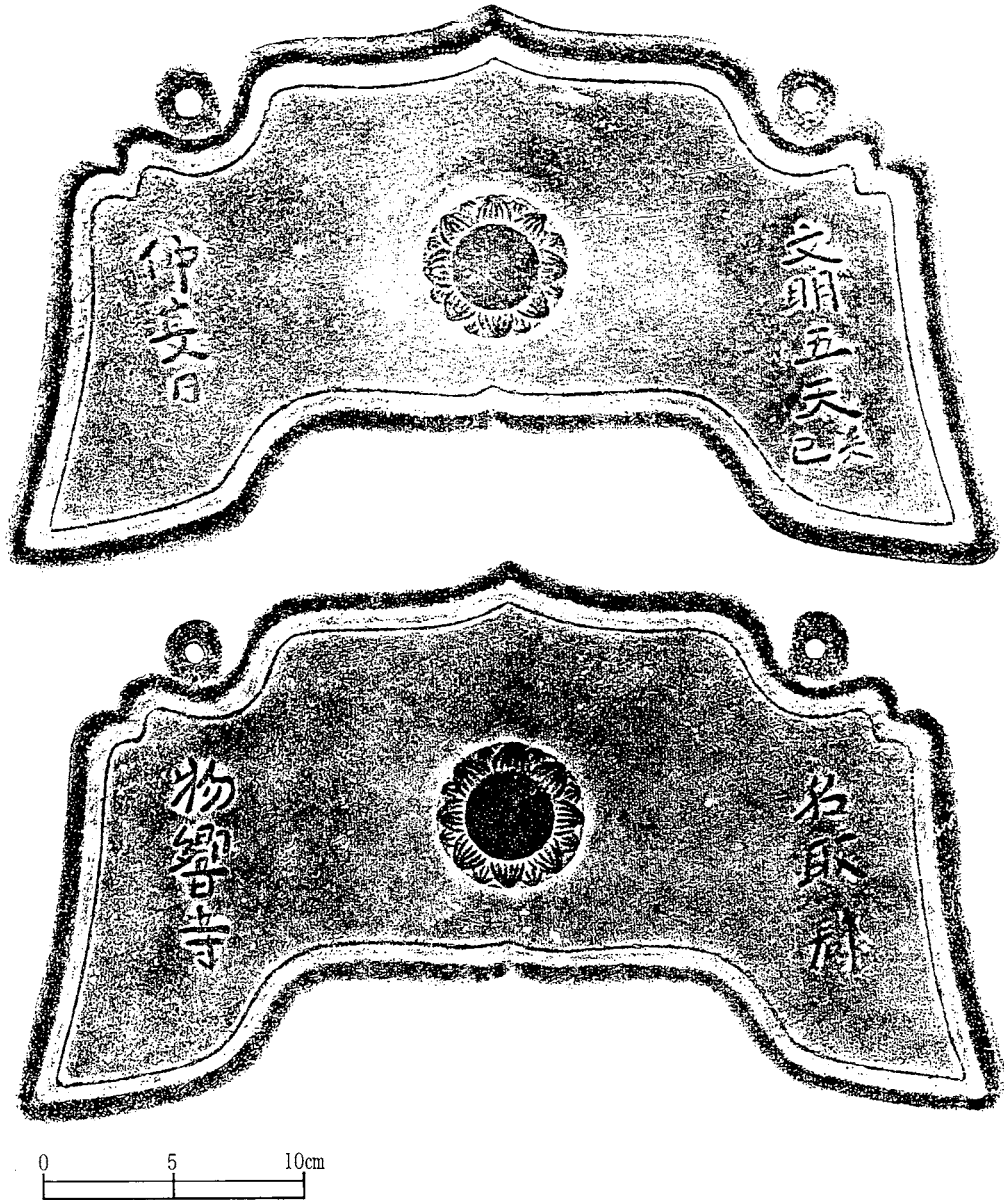
山形県東置賜郡高島町亀岡には、日本三文殊の一つに数えられる松高山大聖寺文殊堂、通称「亀岡文殊」がある。古くは文殊寺といい、大同2年(807)に徳一が創建したと伝えられる。開山当初は、会津の恵日寺との関係が深かったといわれる。後に、真言宗智山派に属し、本尊は大日如来である。天正年間(1573~1592)からは大聖寺と称したという。この大聖寺には仏像や仏画などの宝物が数多く残っており、それらは現在大聖寺宝物殿に納められて、一般に展示公開されている。その宝物のなかに一つの大型の磬がある。磬というのは、仏具の一種で仏壇正面に据えられた礼盤の右側の磬架に架け、勤行の際に導師が打ち鳴らすものである。

大聖寺の磬には、「名取郡物響寺」と陽鑄されており、これは廃寺になった名取郡吉田村の那智山物響寺のものであったことがうかがわれる。この磬を最初に紹介したのは、佐藤東一・武田好吉の両氏が『羽陽文化』に発表した「大聖寺の彫刻と工芸品」と思われる(佐藤・武田 1968)。その後、『高島町史中巻』にも簡単に紹介された(高島町史編集委員会 1976)。また、銘文だけは『山形県史資料篇15下』(山形県 1979)や『仙台市史資料編1』(仙台市史編さん委員会 1995)にも収録されている。磬は、山形県文化財保護協会が昭和31年5月に行った大聖寺文殊堂の宝物調査によって発見されたものであるが、宮城県ではほとんど知られておらず、また県内では中世の磬が見つかっていないと思われるので、ここに紹介したい。

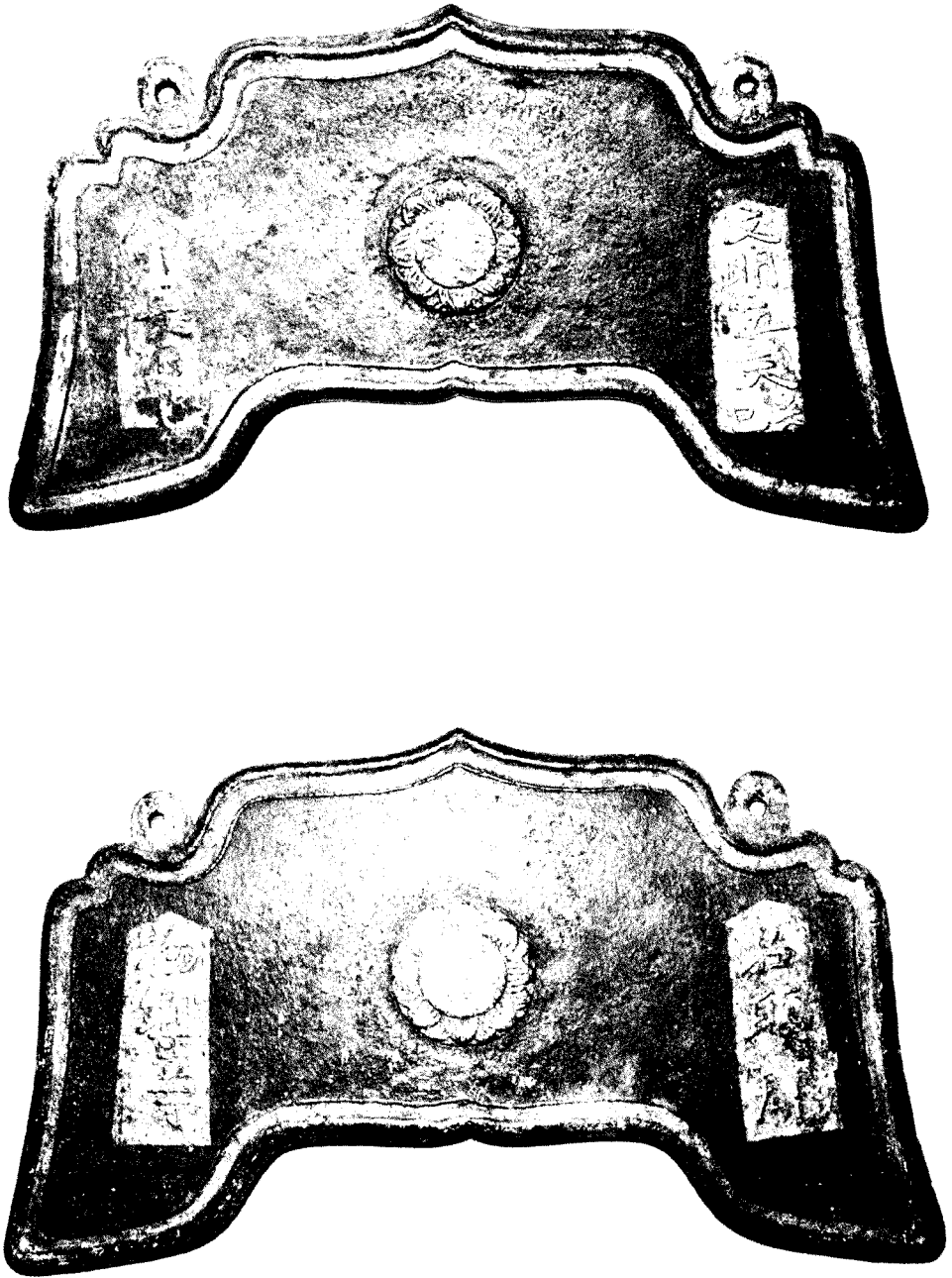
(2) 磬の紹介

磬は鑄銅製の両面式で、池には文様がなく素文である。肩間33.4cm、絃37.7cm、博15.0cm、股入5.5cm、重さは2.2kgあり、かなり大型の磬である。縁部分の厚さは0.8cm、撞座部分の厚さは0.9cmある。表面は、使い込まれて撞座の部分を中心に全体的に反っている。上縁は8弧、下縁は4弧より成っている。肩尖と肩縁は丸く屈曲し、鈕の付いている頸縁は逆に反っている。首縁の反りは僅かで、稜首の尖りは少ない。側縁は下方へ向かってやや反っている。銚は尖らずに丸い。足縁の反りはほとんど無く、脛縁はやや強く反っている。股縁の反りはほとんど無く、中心に股頂がある。鈕は扁円形である。撞座の直径は5.6

cmあり、複式の八葉蓮弁で弁脈がみられるが、蓮子はない。縁の断面は、廣瀬都巽氏の分類によると菱式である(廣瀬都巽 1943)。鍍金は、撞座、銘文、縁と子縁の間の窪んだ部分、および鈕に施されている。特に、4か所の銘文の部分は縦長の将棋駒形に鍍金を施している。このような形態の磬は、基本文献である『磬』(香取秀真 1921)や『日本銅磬の研究』(廣瀬都巽 1943)を調べても見つけられなかったので、非常に類例のないものと思われる。表面の陽鑄銘は向かって右側に「文明五天癸巳」、左側に「仲夏日」と紀年銘がある。



第1図 物響寺磬の拓本



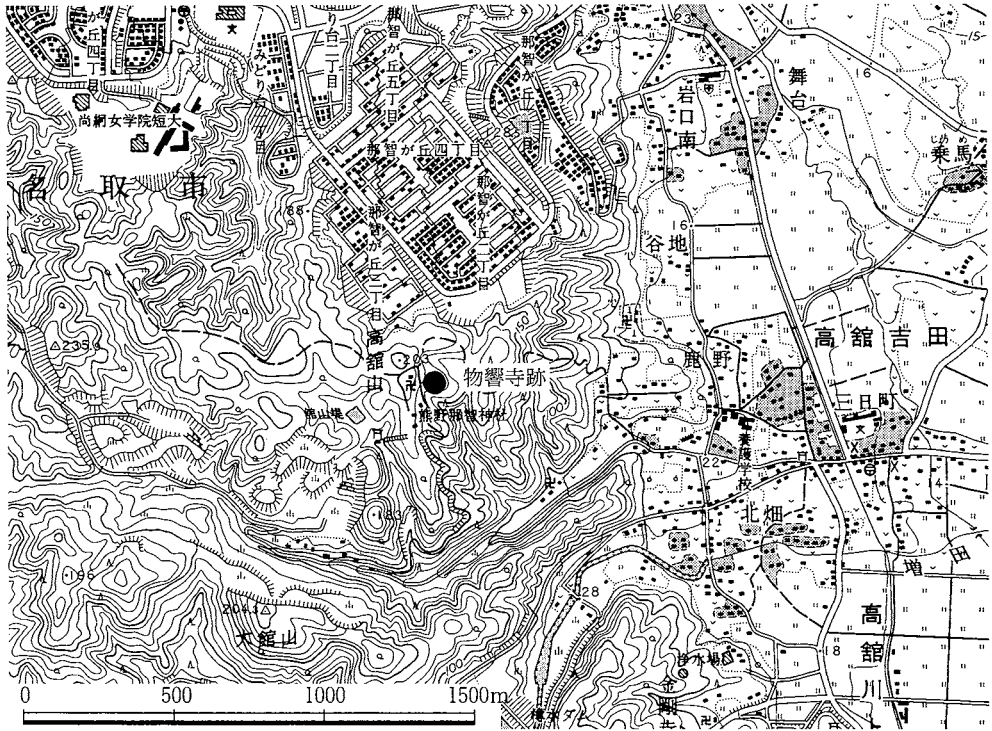
第2図 物響寺磬の写真

る。「仲夏」とは5月の異称で、「夏」の字は異体字である。裏面の陽鑄銘は向かって右側に「名取郡」、左側に「物響寺」とある。銘文によって、この磬が名取郡物響寺のために、室町時代中期の文明5年(1473)5月に作られたことがわかる。しかし、奉納者や製作者などについては銘文がないのでわからない。

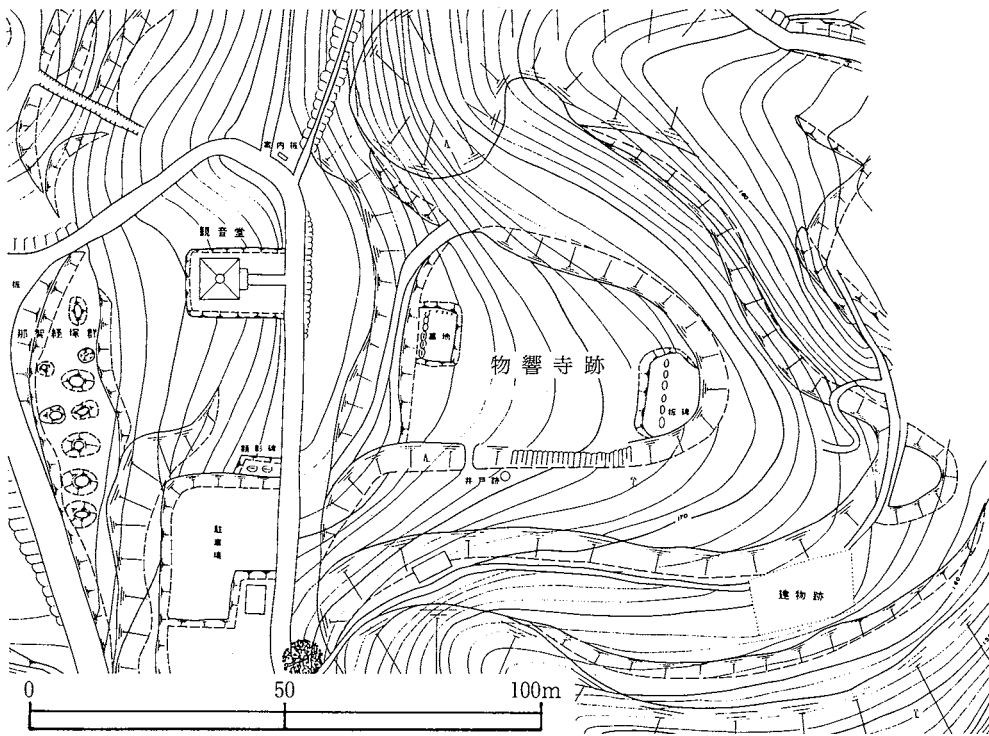
(3) 物響寺について

物響寺跡は、平成2年度に名取市教育委員会が行った、名取熊野三山周辺遺跡群の調査によって特定された。そこは、名取市の西部にある標高約200mの高館山の山頂付近にある「観音崎」と呼ばれている場所で、現在は竹藪になっている。ここは舌状に張り出した地形で、南北36m・東西55mのやや広い平場があり、大きな建物があつたものと推定されている。平場のまわりの斜面には段状の遺構がみられる。平場の東端には、塚状の遺構の上に板碑が6基あり、そのうちの1基には延慶2年(1309)の紀年銘がある。西端には、熊野那智神社に關係する江戸時代後期から明治時代初期の墓地がある。また、南側には井戸跡がある。物響寺跡の周辺には、熊野那智神社、奥州一番札所の観音堂、羽黒山観音堂跡、那智山経塚群、高館城跡などの神社仏閣や遺跡などが集中している(恵美昌之 1992)。物響寺についての文献資料は少ないが、『封内風土記』卷之五の「吉田邑」の項目に次のような記述がある。「観音堂。伝云。三十二代用明帝御宇草創。有寺号那智山物響寺。初号羽黒山。那智権現勧請之後。改号那智山。往古有二十四坊。及三百石寄附之地。乱世之後衆坊荒廢。其地亦失之。往古七間四面之堂也。後光明帝。慶安二年。罹回祿。今僅方二間之仮堂也。」とある。また、寺の項目には「那智山物響寺。真言宗。武州江戸。弥勒寺末寺。伝云。用明帝之御宇草創。開山僧名不伝。豊前州宇佐宮慈現法印中興。不詳其年月。那智権現之別当也。永正中。当家十三世尚宗君。造営殿堂。是以安置十二世成宗君。尚宗君靈牌。二十世肯山君祈尊考雄山君冥福。命誦誦普門品三十三万卷。歷三年而終功。故雄山君靈牌亦安置焉。往古有二十四坊。今悉荒廢。惟存其名。有尚宗君所賜之書。及造営旧記等。無住時附託弥宜治兵衛者。肯山君世公収之」とある(田辺希文 1772)。

これを要約すると、初めは羽黒山物響寺といったが、後に那智権現が勧請されると別当として那智山物響寺と改号した。宗派は真言宗で、江戸の弥勒寺の末寺であつた。用明天皇の時代(586~588)に創建されたと伝えるが、開山した僧は不明で、後に豊前州宇佐宮の慈現法印が中興したが、その年月は不詳である。永正年間(1504~1521)に、伊達家第十三世の尚宗が祖霊を祠る御堂を造つた。その後、伊達綱村は父綱宗の冥福を祈るため、經典の普門品三十三万巻を誦誦させるのに三年かかった。物響寺には、かつて宿坊が二十四坊あり、三百石を与えられて、七間四面の堂があつたが、慶安2年(1649)に火災に遭



第3図 物響寺跡位置図 (1 : 25,000 「仙台西南部」)



第4図 物響寺跡付近地形図 (恵美昌之 1993より)

い、『封内風土記』が書かれた明和9年(1772)頃には、方二間の仮の御堂だけになっていたようである。

『封内風土記』のほかには、物響寺跡から南南西へ約170mほど離れた所にある、熊野那智神社の境内から発見された150余面の懸仏の中に「物響寺」という墨書のある懸仏が1面発見されている。この懸仏は、鏡径15.9cmの鑄銅製で、尊像は像高10.4cmの聖観音像である(東北歴史資料館 1976)。この懸仏群の年代は、鎌倉時代の建治2年(1276)から正応2年(1289)頃で、物響寺がこの時期まで溯る古い寺院であったことは確実である。

(4) おわりに

物響寺の磬が、なぜ遠く離れた亀岡の大聖寺文殊堂に移されたのかはよくわからないが、そこには伊達家が関与していたと推定される。物響寺は前述のように伊達尚宗が祖霊を祀る御堂を造った場所で、一方の大聖寺文殊堂は梵天丸(伊達政宗の幼名)の出生に関わる伝説の中心人物である長海上人が住んでいたところであり、どちらも伊達家と何らかの関係がある寺院であったので、物響寺が廃れた時に、伊達家に関係する誰かがこの磬を長海上人の住んでいたといわれる大聖寺文殊堂に納めたものと思われる。また、物響寺と大聖寺の宗派はどちらも真言宗なので、その辺も何か関係があるかもしれない。

最後になったが、磬の調査に当たっては大聖寺住職の青山永三師に御便宜を計っていただいた、記して感謝申し上げる。

【引用・参考文献】

- 恵美昌之 1992 「名取熊野三山周辺遺跡群調査報告書1—高館山地区—」『名取市文化財調査報告書』第30集 名取市教育委員会
- 恵美昌之 1993 「遺跡発掘総合調査の埋蔵文化財調査報告—名取熊野三山遺跡群—」『名取市文化財調査報告書』第32集 名取市教育委員会
- 香取秀真(編) 1921 「磬」『東京美術学校工芸史研究室研究報告』第2輯 工芸美術会
- 佐藤東一・武田好吉 1968 「大聖寺の彫刻と工芸品」『羽陽文化』第79・80号亀岡大聖寺資料調査特集 pp3~14 山形県文化財保護協会
- 仙台市史編さん委員会 1995 『仙台市史資料編1』古代・中世 仙台市
- 高島町史編集委員会 1976 「大聖寺宝物」『高島町史』中巻 pp473~477 高島町
- 田辺希文 1772 『封内風土記』(『復刻版仙台叢書封内風土記』第1巻 宝文堂)
- 東北歴史資料館(編) 1976 『東北歴史資料館報「陸奥」』No.4 資料展示かけほとけ特集 東北歴史資料館
- 廣瀬都巽 1943 『日本銅磬の研究』清閑舎
- 山形県(編) 1979 『山形県史資料篇15下』古代中世史料2 山形県